

イチゴの休眠打破ならびに早熟化におよぼす ジベレリンの影響（予報）

浅井 繁利・高尾 宗明
(福岡県園芸試験場)

ASAI, S. and TAKAO, M.

Effect of Gibberellin on Awaking Dormancy of Strawberry (Preliminary report)

半促成イチゴの主要品種であるダナー種は、北九州などの暖冬地帯では、年により気象の変動によって低温不足となり、株がロゼット発育し、大減収をももたらすおそれがある。そのためダナーの休眠打破に対する Gibberellin (GA) の処理効果について低温経過度を組合わせ、1965~67年にわたって検討したので、その結果を報告する。

試験方法

5℃以下の自然の低温経過時間を基準に 200h, 400h, 500h, および 600h 後にビニールトンネルを被覆し、標準無処理区と GA の濃度と処理回数を、表のとおり組合わせ、'65年は10日、'66年は5日ごとに、1株1回5ccを小型噴霧器で散布し、1区15株を用いた。収穫調査は4月20日までを早期収量とした。

試験結果と考察

草丈、葉数などの株生育は、各低温経過区とも高濃度、多回数処理区ほど初期から収穫期にかけて旺盛な傾向を示し、とくに草丈（葉柄長、葉の太さ）の伸長に明確な効果を示した。しかし、後期には低温十分の 500~600h の処理区は無処理区に劣った。葉数の増加は、収穫期ころまでは草丈と同様の傾

向を示したが、4月中~下旬ころから 200h では10ppm 6回, 20ppm 6~8回区, 400h では10ppm 6回区が各無処理区にまさった。5~600h では大差ないかやや少なく、その効果は草丈ほど顕著でなかった。全収量については、200h では無処理に比べて著しい増収効果をあげたが、400~600h 区では大差なかった。早熟効果については200h と500h, 600h 区は何れも無処理区に対して顕著な増収をあげたが、400h では20ppm 区以外は無処理と大差なかった。

果房の長さや、果形の変化には GA の高濃度、多回数処理区ほど著しく、6回以上の処理は実用上問題である。変形果は果実が長くなりネワクを生じたり、果溝ができるものが多かった。

以上から、イチゴの休眠打破に対する GA 処理の影響は、低温の充足度によって異なるが、ダナーでは5℃ 400h 以下の低温不足では、10~20ppm の4~6回処理によって、低温の補足的効果が認められるが、変形果発現との関連で検討を要する。

実用的な早熟目的のためには、低温 500h では5ppm の2回、600h では10ppm の1~2回をビニール被覆時とその後5~10日後の処理が効果的と認められる。

第1表 株 生 育 と 収 量 (1株当たり)

試験区 項目	5℃以下自然低温 400 h									500 h				600 h						
	無 処 理	5 ppm			10 ppm			20 ppm			無 処 理	5 ppm		10 ppm		無 処 理	5 ppm		10 ppm	
		2回	4回	6回	2回	4回	6回	2回	4回	6回		2回	4回	2回	4回		1回	2回	1回	2回
草丈 (cm)	18.2	24.5	24.7	27.8	19.5	21.5	23.6	20.2	21.2	24.5	24.7	18.6	22.8	22.2	22.1	33.0	28.1	27.3	29.7	24.4
葉数 (枚)	14.2	19.3	19.0	19.5	19.2	17.4	21.6	17.5	18.5	16.5	18.1	19.2	20.4	21.1	21.3	21.5	19.1	22.6	20.2	17.9
果数	17.6	17.4	15.9	16.3	18.1	18.1	19.3	20.0	23.3	25.1	11.2	20.1	21.4	17.8	21.3	12.4	17.6	19.1	21.4	26.4
早期 果重g	21.3	17.7	21.1	21.2	19.7	19.8	21.9	23.6	28.2	26.4	14.5	21.6	21.8	20.4	21.3	16.3	19.9	22.9	24.7	28.0
全果数	36.1	38.5	34.3	37.5	36.6	38.9	45.2	34.3	37.7	35.7	38.2	34.3	41.9	40.5	49.9	36.5	32.1	33.5	39.7	35.6
変形果数	3.7	5.3	3.9	3.5	5.4	8.8	6.5	5.2	3.5	4.0	3.2	5.3	6.0	7.7	7.2	3.4	3.3	2.7	4.6	3.4